

生きものに配慮した水路整備 イベント行いレンコンをPR



イベントでハス田や水路にいる生きものを探す子供たち

▲「えんたのれんこん」メンバーと田代研究員。左から沖野ゆりこさん、佐々木いつ子さん、田代研究員、齋藤倫子さん、齋藤会長、高井綾子さん

ハス田で生消交流

「ハス田を維持するのに圃場整備は必要。でも環境も守りたい」と話す齋藤繁明さん(41)はレンコン3畝。「えんたのれんこん推進協議会」(徳島県鳴門市大津町、約15戸)の会長を務め、ハス田を拠点にした生消交流を展開する。ハス田や水路は、希少な淡水魚や湿地性の絶滅危惧種の植物が生息する生きものの宝庫だ。水路の整備では、環境に配慮した工法を採用した。県のエコファーマー認定を受け、農薬と化学肥料を減らした高品質のレンコンを生産するとともに、イベントを定期的に開催して、消費者に生物の豊かさや自慢のレンコンをアピールする。

えんたのれんこん推進協議会

徳島県鳴門市

「メダカやドジョウ、コイ 緒ちゃん(1)を連れて、イベ など多くの生きものがある。 ウナギを捕まえることもあ ントに参加した。最初、泥に 入るのに抵抗があった春菜ち ゃんも、最後はどろんこにな った(縁田)」とは、昔、少 数な淡水魚や湿地性の絶滅危惧種の植物が生息する生きもの

催しをきっかけに レンコン購買客増

ハス田は、低地で水はけが 悪く、稲作には適さない。「え んた(縁田)」とは、昔、少 数な淡水魚や湿地性の絶滅危惧種の植物が生息する生きもの

者が口にする機会が少ない。田代研究員は、「イベントを始めてから、直接買いに来る人は5割程度増えていると思ふ。データを精査して効果を検証したい」と話す。

協議会の活動は、農業土木や環境システム学が専門の田代研究員が調査で集落を訪れた際、繁明さんの母親、齋藤倫子さん(70)が声を掛けたのが始まりだ。

「息子に継いでもらうには、軽トラックが入れる道路と水路の整備は必要だ」と感じ

自然と共生する農業実践

地元のレンコンのおいし

「えんたのれんこん」メンバーと田代研究員。左から沖野ゆりこさん、佐々木いつ子さん、田代研究員、齋藤倫子さん、齋藤会長、高井綾子さん

さな田んぼのことだ。

県農林水産総合技術支援センターの澤田英司主任班長は、「レンコン栽培には最高の土地。菌ごたえがよく、高品質のレンコンが作れる」と評価する。ただ、ほとんどが県外に出荷され、地元の消費

「自然がなく なり、魚がい なくなるのも寂しい」とも考 え、相談を持ちかけた。

水路に段差設け 水の流れに工夫

行政や建築業者との協議には、田代研究員もアドバイザーとして参加した。片方の法

面と底面をコンクリートで覆わず、水生植物などが生育できるようにした。また、稚魚や産卵前の魚など多様な魚が生息できるように水路に段差を設けて、水流の速さに差を付ける工夫もした。「水路に段差を付ける工法は、世界的にも例がないのではないか」と田代研究員。

2004年には、県内では絶滅したと考えられていた日本固有の淡水魚「カワバタモロコ」が発見されている。しかし、地域の中には、カワバタモロコを「ただの魚」と言う農家もいる。田代研究員は、「単純に『希少な生きものを守ろう』という活動はしたくない。生産者にもメリットがあるような仕組みにしたかった」と強調する。

倫子さんは、「田の生きものは、農家の優しい心の証だ。生きものと共生しながら高品質のレンコンを作っていくたい」と話している。